

台湾漢族の墓—祀られる者と祀る者—

植松明石※

〔1〕 はじめに

漢族における死の儀礼は、死によって永久分離した靈魂とその容器であった死体に関するものであり、死者をとりまいて新たな秩序が生成され、且その確認の場、時といえる。広大な中国において葬式は規範化された儀礼行為であったのに対し、死体の処置に関しては多様な様相でであったことが指摘されている（ジェームス・ワトソン 1994）

台湾における漢族の死体儀礼について考える場合、その大陸の故地についての考察が必要である。中国大陆における死体処理が、土葬、風葬、単葬、二重葬などさまざまな様態が存在する中で、台湾漢族の故地は主として福建、広東省地域であり、これらの地域は何れも二重葬（複葬）が主流の地域であるからで、台湾漢族の死体処理儀礼は、一部を除き多くは二重葬である。最近では、種々の理由から火葬が実施されるようになり単葬と考えられる場合も多くなっているが、一方複葬としての一次葬（安葬）で行われる土葬部分が、火葬によって骨灰化がはかれると考えられているとも云える。

本稿の調査地、台湾北部新竹県の客家村A里、B村は、主として清朝時代に広東省から移住してきた客家によって構成されている。客家語を用い、生活習慣も独自なものを持っているとされる。調査の中心であった新竹県A里、B村は単姓村ではなく、多くの姓を称する複姓村で、大きな宗族はごく少ない。

一般に正常とされる死者は父系男子孫によって実施される諸儀礼を経て魂は位牌祭祀の形をとり（陽祖）、一方死体は埋葬儀礼を経て骨となり、墳墓（吉葬墓（風水））に祭祀され、魂と同様に祖先祭祀の対象（陰祖）として死者儀礼を完成する。台湾に移住した漢族の生活は開墾の困難、原住民との抗争等その生活は非常に困難なものであり、吉葬墓に祀られる完結した生涯を得ない者も多かったと思われる。しかし幸いに現在まで子孫を繁栄させた人々の大部分は吉葬され祭祀される経過をたどったと考え

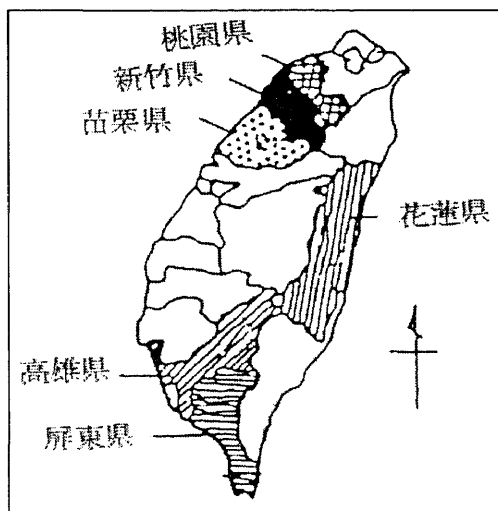


図1 台湾客家村地域

※民俗文化研究所代表

られる。

吉葬墓はもともと個々にその風水にあった良い土地に造られたことから、一ヶ所ではなくあちらこちらに存在していた。

ところが最近、数百、数千の骨骸を安置できる合葬墓祖塔が作られるようになった。こうして散在する吉葬墓、一ヶ所の祖塔とよばれる巨大合葬墓、そこには祀られる者、祀る者双方に様々な関係がある。本稿はそれらの状況について報告し若干の考察をおこなうものである。

〔2〕A里における複葬の過程

1. 一次葬（安葬）

諸儀礼を経て棺木に納められた死体は、埋葬地に行列を組んで向かう。棺木は宗親会（任意の同姓集団）の人々にかつがれる。埋葬はすべて地理師の指示に従い、葬儀をおこなった道士あるいは和尚が行くことはない。

山（墓地）につくと、墓穴はすでに宗親会の人々によって掘られている。地理師により方位、時刻が決定され棺木は穴におろされ、土、芝草がかけられる。棺木の足の方に栓をした孔があり、この栓が引き抜かれる（放栓、開龍門）。栓を引き抜くのは腐敗促進のためである。墓穴は深くないので土をかけた棺木の形に盛り上がって見える（亀甲型）。土をかけた棺木の前（足の部分）に死者の名前を書いた墓碑をすえ、墓桌がおかれる。地理師の儀礼があり、墓桌に供物を供え、一同は拝々をする。供えた茹で玉子をみなで食べ、その殻を墓の上にまきちらす。

埋葬が終了し、その後一年間は拝々することなく草が生えるにまかせ、死後の腐敗、骨化はすすむ。

開青：一年後の良い日、清明の前頃、最初の墓参りがおこなわれる。死者に関係する人々があつまり、墓、土地神に供物を供え、金銀紙を焼き爆竹をならし、にぎやかに拝々する。以後この一次墓（安葬墓）の拝々は許される。

2. 二次葬（検骨と吉葬）と吉葬墓

① 検骨

埋葬後、3年～7年位後、検骨を専門の検骨師に依頼する。親族は立ちあうのみである。検骨師は骨を掘り出し、きれいにふき、一定の順序で陶製の甕（金斗）に入れる。甕には姓名、輩などが記される。

② 吉葬

検骨された骨骸を納めた金斗は直ちに二次墓（吉葬墓、A里では風水とよぶ）に納められ、祖先として祭祀されるわけではない。吉葬する良い日、良い時を待ち、簡単な小屋、木陰などに置かれる。こうした吉葬を待つ金斗は墓地のあちらこちらにみられる（写真1）。吉葬墓の有無も大きな問題である。

良い日、良い時を得た金斗は、地理師の指示にしたがって二次墓に納められ、これによって

骨骸となった死者は、正しく祖先として祭祀されることになる。

最近、一次葬を土葬でなく火葬にすることが進められている。これは都市に於いていちぢるしい葬法で、又政府もこれを奨励している。生活の変化、埋葬する土地の問題、葬儀館の発達など種々の背景が考えられる。A里においても最近火葬がみられるようになった。従来、自己の房屋の正庁を中心に展開されてきた葬儀を、設備がととのった葬儀館でおこ

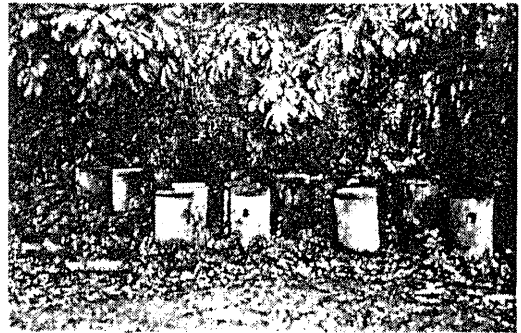


写真1 吉葬を待つ金斗

ない、葬儀が終了すると直ちに火葬場に行き骨灰化されるということになる。しかし、火葬された骨灰の金斗も、直ちに二次墓（吉葬墓、風水）に納められるわけではなく、従来と同様に地理師の指示のもと、良い日、良い時を待って吉葬され、祖先（陰祖）として拝々される。このように火葬によって直ちに骨灰になるのであるから、土の中で骨化を待つ従来と異なり吉葬への期間はかなり短いことになる。

従来土葬による一次葬を経て吉葬に至る過程は、死者の骨化、吉葬墓の有無、祭祀者の経済状況問題など、陰祖として祭祀される年月は、靈魂の位牌祭祀（陽祖）に比してかなり長いのは一般であった。

かつての中国東南部の場合について、フリードマン（1966）、ルービー、ワトソン（1988）らは「吉葬にたどりつけない死者が多い」「大部分は忘れられてしまう」などと記している。貧しい人にとって安葬はされても、検骨されない者、検骨されても吉葬までたどりつけないまま年月を経る死者が多かったということだ。

台湾の場合、A里の人々の状況などを考えると、移住当時は非常に困難な生活であったことが多く、死者が安葬も吉葬もされない場合もあったと考えられる。現在に至った人々の來台祖以来の生活を聞くと大部分は完結された道をたどり吉葬されたとおもわれる。多くはないが、族譜を有するような比較的富んだ宗族の場合、來台祖以来の宗親の吉葬墓の場所が族譜に細かく記されている。吉葬墓には種々の形態がある。

〔3〕祖先祭祀

1. 靈魂と骨

① 陽祖・位牌

すでに述べてきたように、死によって分離した靈魂は諸儀礼を経て正庁祭壇上の位牌にその名を記すことによって正しく祖先の一人として子孫に拝々されることになる（合火）。死後約3年間で陽祖となるのである。正庁の位牌はみだりにさわったり、移動したり出来ない尊い存在となる。

このように位牌は、人々の生活する房屋の中央にある正庁の祭壇に祭祀されるのが一般である。正庁は生活する世帯共有の一室で寝室などにはしない。大抵、長椅子、テーブルなどがおかれ、壁には祖先の肖像画や写真が飾られ、客室ともなる。A里では、位牌祭祀の場としてこの正庁とは別の独立した宗祠、祖堂をもつのは少なく、T姓の場合も宗祠はない。

② 陰祖・墓

一次葬（安葬）のあと、死者の体は次第に骨化が進み、3～7年の後検骨され、金斗に納められる。さらに地理師による良い日を待って吉葬墓（風水）に安置され、ようやく陰間の陰祖として子孫に拝々されることになる。

このように、祖先には位牌に祀られる陽祖と、吉葬墓にまつられる陰祖があり、それぞれが別々に祭祀される。本稿で対象とするのは主として陰祖に関する考察である。

2. 墓

① 墓の形態

A里の墓は、私有地につくる場合もあるが、多くは公共墓地を利用している。A里の人々が多く利用する公共墓地は、規制の少ない一般墓地で、居住地の背後に続く丘陵地帯で、隣接して廟があり、風水がよいと考えられている。墓地の斜面からの眺めると遥か下方に大きな河が流れ、さらに遠く山々の重なりが見渡せる。最近、隣接して高級住宅地も開発された。この公墓地は清朝の時代、義塚とよばれたもので、道光2（1822）年、設けられたとされる。

死体を納める一次墓は、基本的には一人墓で、その形は、図2のように墓亀型の比較的簡単なもので、規制の少ない一般墓地の場合、吉葬墓と混在している。開青までは草茫々の有様である。骨化が進み、検骨がすむと骨骸以外の棺木とその他はすべて不要なものとなり、掘ったまま打ち捨てられ、意味はなくなる。

二次墓（吉葬墓）は、もともと一人墓であったと思われる。これは主にその死者にふさわしい良い風水の地がえらばれた。A里の公共墓地をみると、一人墓の他、夫婦、家族などの吉葬墓と最近非常に多くなった数百箇の金斗を納める祖塔がみられ、掃墓の際、拝々の対象となる。

このように祖先祭祀の対象となる骨骸は、一次墓（安葬）ではなく、二次墓（吉葬墓）である。代々の子孫によって祭祀される二次墓はその形態上も種々工夫がみられる立派なものである。

この二次墓の形態を、平敷令治は6種分類して示している（平敷1989）それによると

i 墓亀型（図3 徐1984）

"墓碑の背後を亀甲型に作る形式、安葬・吉葬のいずれにも用いられる伝統的な型式"とする。

ii 墓庵型 iii 家型

墓碑の背後に墓庵があり、墓碑から墓庭にかけて吹き放しの庵が建てられている型式。

或いは家状に建てられたもの。

iv 郭型、v 饅頭型は複葬をおこなわない外省人に多いとされる型式で、VI 塔型と共にこの例

は少ないとされる。

A里では最近祖塔といわれる非常に多くの金斗を納める合葬墓が建てられているがこれらは形態的にはii墓庵型、iii家型が多い。

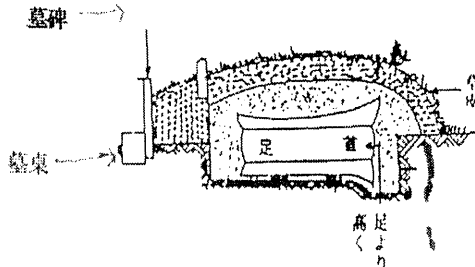


図2 一次墓 棺木が埋められた状態
(徐 1984)

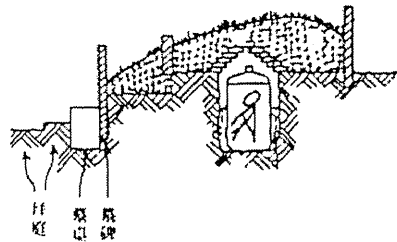


図3 吉葬墓（墓庵型）の状況
(徐 1984)

② 墓の構造

このように墓の形は種々あるが、構造上からすれば、a, 一人 b, 夫婦 c, 家族 d, 多数墓などであり、祖先祭祀に関する種々の考察が必要となる。

一人墓は勿論、家族墓にせよ、そこに納められている金斗の数はそれ程多くない。したがって宗族全体からすれば、関係する墓はあちらこちらに散在することになる。

漢族と同様複葬をおこなってきた沖縄の場合は、三十三年忌をすぎると祖先としての融合体になるとして、骨が墓内の奥の一定場所に合体されることから墓の規模の変更は少ない。こうした操作のない漢族の場合、多数の墓が、風水の問題もあって散在することになる。又、來台以来2,300年を経過し吉葬墓の数も多くなっている。これは墓の祭祀を困難にするひとつの原因にもなっている。

そのようなことも背景のひとつとして、近年、祖塔とよばれる巨大な合葬墓が、A里のある新竹県他桃園県、苗栗県などにつくられるようになった。

祖塔は家族墓の域をこえ、來台以来の宗族の金斗を将来にわたって納めようとするもので、その金斗数は数百～数千、萬にまで及ぶ。この祖塔の成立によって、宗族の骨骸の大部分は、世代、輩、夫、妻、生年月日をもとに祖塔内の棚に安置が可能となった。

すでに述べたことではあるが、靈魂を祭祀する位牌では、儀礼上の手続きを経て、位牌に靈魂を憑依させ、且その姓名を記すことによって正庁祭壇上に安置され、祖先祭祀の対象となるのに対し、死者の骨は、儀礼上の手続きは勿論必要であるが、何よりも死体という物理的実体との関連上、簡単に祭祀の道を継続してたどれないことが多くなる。

かつて東南中国において、特定の死者は安葬されたが、おおくは吉葬されず、祖先祭祀の道に行き着けなかったのであり、理由として社会的、経済的な問題の他、靈魂と骨の認識の違いなど種々の考察がある。例えばフリードマンは、骨と位牌は、祖先の対極的で相補的な二つの

部分をなして、位牌の子孫に対する能動性に対し、骨は受動的、風水上の道具、傀儡にすぎないとしている。

一方多くの金斗を安置する祖塔は、個人墓に対し、一族の骨骸が失われることなく、全員を同一の空間に安置し祭祀できる可能性をもつ装置である。これにより、來台祖以来現在までの骨骸は勿論、数百年後の安置空間は存在できることになった。

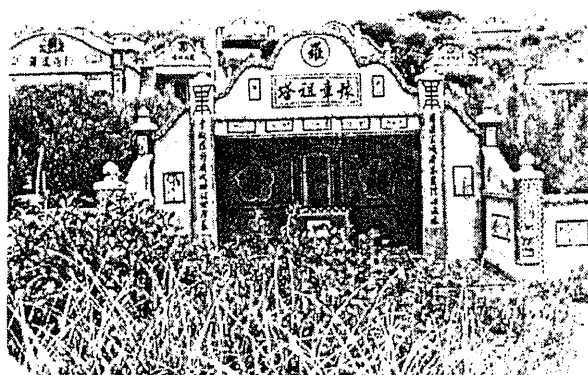


写真2 公共墓地に林立する祖塔（徐 1984）

A里での祖塔は私有地に造られたものも見られるが、公共墓地（一般墓地）にも非常に多くみられる。一般墓地は示範墓地より規制が少なく、A里のこの墓地は、古く清朝時代に造られたとされ、使用者はずっと以前から使用しているので、すでに使用していた吉葬墓を改築して祖塔にすることが比較的容易であると思われる。祖塔を造るに至る過程は様々である。

祖塔建設の過程（T姓Cさんの場合）

T氏の來台祖十二世は、広東省饒平県の出身で清朝乾隆年間に來台し、桃園県楊梅方面で開墾をおこなった。多くの苦難があったが次第に生活が安定して子孫が増えた。清朝時代、日據時代、そして第二次世界大戦敗戦、国民党來台と多くの政治的、社会的変革を経過した。人々は農業以外にも職を求め、現在は新竹、花蓮、台中県などに分散居住している。

十七世T氏は兄弟3人と共に日據時代にこの地の廟の小作人としてやってきて農業を営み、小作人に供与される房屋に分居していた。第二次世界大戦が終わり、国民党政権の支配となる。農地改革があったが、Cさんの農地は事情があって解放されず、現在も小作人のままである。所有権はないが農地や房屋の耕作権、居住権はある。

A里では一般に墓祭祀（掃墓）は年一回清明のころにおこなわれる。T氏の掃墓はもとは農曆1月20日ときめられていた。当時の吉葬墓は一人墓が基本であったから、來台祖十二世、その妻をはじめ、それまでの祖先の墓は各地に散在していた。このため掃墓は各地の墓を各世帯分担して実施していた。掃墓には墓、土地神などに供える三牲をはじめとする供物を背負い、当時は徒歩で山を越え、川を渡る一日がかりの儀礼であった。

一方、中華民国となって土地制度をはじめとする社会的、経済的变化により、墓を造る土地の利用も次第に問題になってきた。また、人々の生活も変化し、農業でなく給料生活者も多くなり、住居は分散し従来の掃墓の方法は次第に困難になってきた。そこでT氏の人々は祖骸を一堂にあつめる祖塔建造を考えることになった。祖塔のような大型の墓は、日據時代にもみられたが、それは富んだ土地所有者の場合であり、A里のように小作農民や小農の多い土地では少な

かった。

種々相談の結果、1961（民国50）年従来の公共墓地に90名分の骨骸（金斗）を納めることのできる墓庵型祖塔が完成した。安置を希望する場所数によって費用を拠出することになっていたもので、すべての人が安置されたわけではない。90名分安置のこの祖塔には、十七世までしか安置できないことから、この時点でその後の安置をどうするかが問題になった。そこで再び協議されることになった。

20年後1981（民国70）年代、今度は600名分金斗を安置できる現祖塔が完成した。この時の費用は、当時十八世男子宗親1人あたり25000元を拠出し、これは宗親1人と妻、その子2人の計4人分の安置場所分であるとされた。この祖塔の後方墓庵部分は非常に広く、後方に高く盛り上がり、内部に段差30センチ程の段が32ある。横は17～19に区画され金斗が安置されるようになっていて現在は十八世も安置されはじめている（図4）。外部墓庵部には吉葬を待つ金斗の一時安置部屋があり、墓碑、墓桌、拝庭がもうけられ、掃墓の日には、拝庭にテーブルがおかれ、供物がならべられるようになっている。

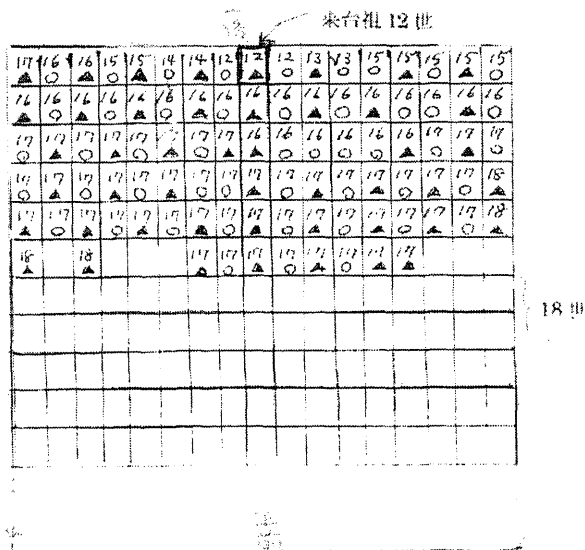


図4 T姓祖塔金斗の安置情况（1991年当時）
▲男 ○女 数字世代

3. 祖塔の構造

T氏祖塔の形態、大きさなどはA里の一般墓地にも非常に多く見られるもので、これは他の公共墓地にも共通する。

ところが、私有地の祖塔には数千から萬に及ぶ金斗を収容する巨大なものがみられ、広い駐車場も大抵つくられている。（植松2006）

B村Z氏祖塔は2層建、1階は土葬部分、2階は火葬部分、総安置数6000。

同じくB村A氏祖塔は、3層、土葬、火葬層にわかれ、総安置数12137とされている。

何れも200年分の金斗安置が可能と計算されているという。

Z氏、A氏共に農地改革以前は多くの田畑を有し、祖先祭祀のための共有田も有していた。現在それらは失われたが、祖塔建設に際しての拠出金、楽捐金の残金が以降の祖塔管理の費用に役立っている。

祖塔での金斗安置は、世代、輩、生年月日、夫、妻などにより規定され、Z氏、A氏の場合は、

土葬、火葬の別も考慮され安置場所を異にしている。土葬に比し火葬骨灰は量が少なく、金斗は小さいため安置場所がちいさくてすむからである。

T氏祖塔の場合は、土葬、火葬の区別がなく状況によって決められた場所を適宜変更する。T氏祖塔の金斗安置状況は図4に示してある（1991年当時）。

祖塔に安置されるのは宗族員であれば誰でもすべてというわけではない。祖塔建設の折の規定によるが、おおくは希望安置場所数によって一定の金額を納め、安置場所を決定しておく。すでに吉葬墓を有している者、祖塔のような合葬をこのまない者、など様々の理由で金を納めない者は安置する資格がない。T姓祖塔の場合は、図4でみられるように、來台祖以来の骨骸のかなりの数があつめられ安置され、現子孫の骨骸安置場所も予定され、祖先の全体像、一体感、現実感が増し、拝々する子孫自身を含めた宗族のイメージが提示された。

位牌の場合もそうであるが、祖塔に安置された金斗の女性はすべて族員の妻である他姓の女性である。この他姓の女性の金斗は、夫と同様に独立した空間に安置され、その姓名が明示されている。旧くは位牌と同様に姓のみであった。

4. 祖先を祀る儀礼

T氏の例を中心に、祖先祭祀の状況を「位牌」と「墓」について述べる。

① 位牌

T氏の場合、宗祠をもたずそれぞれの世帯が居住する房屋の正庁祭壇に位牌が安置されている（図5）。T氏Cさんは、長大な小作人家屋の向かって右端3棟に、3兄弟4世帯A、B、C、（D世帯は同屋敷の別家屋）に住み、正庁を共有していた。この小作人家屋には、

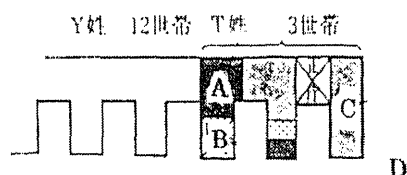


図5 小作人家屋の住み方（T氏）

T氏の他に小作人Y氏12世帯が住み、1970年当時100人

以上が居住していた。T氏A、B、C、Dは別財、別食、別住の生活をし、特別の祖先祭祀は共同で共有正庁でおこない、朝晩はC世帯が拝々し、線香など他の世帯も負担した。

正庁祭壇の位牌は大型の複数祖先の名を記した合祀型のもので、中央に大文字で「T姓歴代始太高曾祖考妣之神位」と記され、始祖より來台祖までの祖先（考・妣）を一括してあらわし、その左右に、世代、輩、生年月日、夫、妻により來台祖から現在までの祖先の姓名が記されている（図6）。

正庁祭壇上には、位牌のほか義民爺、竈君などの神霊も祀られていた。

1981、農曆12月30日の儀礼は以下のものであった。表1参照。

午前：C世帯のみでおこなわれた。対象は玉皇上帝（天公）、大歳君、竈君、龍神、義民爺、門神、土地公など。

午後：位牌、義民爺、儀礼には4世帯の代表が位牌、義民爺のそれぞれに供物をそれぞれ供え拝々した。

正庁祭壇：一段と高い祭壇には位牌，義民爺，竈君がまつられている。ここにはそれぞれに神霊に茶3碗，餅菓子1，共通した供物として蒸しパン2盛，みかん2盛，蒸しパン大1が供えられた。

臨時供物台の様子（表2）：参加したA，B，C，D各世帯からの供物がそれぞれ供えられたテーブル上は一杯となる。この時4世帯がそれぞれ三牲を添えて共通して拝々したのは，祖先と義民爺であった。供物を夫々の世帯が持ち寄り，合同することはない。義民爺は客家の守護神である。竈君はカマド神で一般にはカマドに祀られ，世帯単位の神である。

Cのみが供物を供えた香籠は死後3年を経ないまだ位牌に合祀されないC世帯関係の死者のためである。この死者は，A，B，Dにとって自己の父の弟にあたるのだったが供物はあげなかった。

夕方C世帯では香籠にごはん，おかずを供えて拝々した。床神にも拝々した。ごはんは一般に鬼に供えるものである。

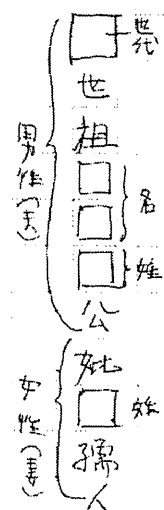


図6 來台祖以後の祖先の記名

表1 農曆12月30日の儀礼

	1981年 農曆 12月30日
午前	6:00 玉皇上帝の拝々・出入口臨時祭壇，C全員参加 (玉皇上帝，門神，位牌，灶君，龍神，義民爺(旗))
	8:00 大歳君拝々 正庁祭壇灶君前，C全員参加
	朝食
	8:20 土地公廟拝々(土地公，天公) C代表1人が行く 9:00 正后 五谷爺拝々(農神大帝)，五谷廟，C任意1人が行く 終って街のタンキーへ
午後	13:30 祖牌，義民爺拝々 正庁にA B C Dの代表1人ずつ参加，Cは灶君，香藍，祖牌，義民爺，灶君，香藍に祭品を，A B Dは義民爺，位牌に祭品を供える。
	17:20 香藍の拝々，死者(死後3年間)の拝々 C参加 ごはん，おかず
	17:30 床神拝々，ベッドの足元，Cの代表1人が行う
	夕食 22:30 閉門，24時すぎ出入禁止。

この日の拝々から以下のことがわかる。

祭品は祈願者が神霊に贈与するものであり、そのご利益は祈願者に返される、直接互酬性の考えがみられる。

一年最後のこの位牌祭祀にA, B, C, Dの3世帯が参加した。婚出女性の姿はない。

祖先にならない死者に対してのみ子孫であるC世帯によってごはんの供物が供えられた。

祖先には4世帯が夫々三牲を供えた。

位牌に祀られた祖先は、宗親の男性とその妻である他姓の女性であるが、女性の個別性は弱い。位牌上には、T姓の始祖から祭祀されているが、その個別性が提示されているのは來台祖からである。來台祖からの祖先は、これを祭祀する世帯の人々にとってまさしく自己の生活とむすびつく人々であり、子孫を結束させる重要な「祖」となっている。T氏は宗祠をもたず位牌による一族統合は果たされていない。

② 墓における祭祀（掃墓の様子）

墓（吉葬墓）に対する掃墓の状況は以下のようなものである。T氏一族の掃墓は、もと農曆1月20日と決められていた。吉葬墓はもともと一人墓で、各地に散在しており、担当した世帯が夫々の墓に供物を供え拝々し、一同集まって祭祀するということはむずかしかった。

現在はA里にある公墓地に造られた祖塔での拝々となってから公暦3月最初の土曜日午前10時よりとなった。給料生活者が多くなり、住居は散在したが交通手段が容易になったこと、また多くは土曜日が休みであることから集まりやすい日時であった。

人々はこの日、墓に集まり、草を刈り、掃除し、綺麗に墓域をととのえ、拝庭に供物台を用意する。集まった人々は、線香をあげ、三牲を中心とする供物を供える。ごはんはない。供物

表2 臨時供物台の様子

C世帯	灶君	三牲（アヒル、豚肉、玉子）
	祖先	三牲（魚、豚肉、鶏）
	義民爺	三牲（豚肉、アヒル、玉子）
	香籠	もち、むしばん、みかん、線香、金紙、銀紙
A世帯	祖先	三牲（魚、鶏、豚肉）
	義民爺	三牲（アヒル、豚肉、豆腐乾）銀紙
B世帯	祖先	三牲（鶏、ソーセージ、豚足）
	義民爺	三牲（鶏、魚、豚肉）銀紙、バク竹
D世帯	祖先	三牲（鶏、魚、豚肉）
	義民爺	むしばん、銀紙、バク竹

は各世帯毎に持ちよったもので、供物台はところせましと一杯になる。代表者が請神の言葉をのべ一同拝々する。この代表者は年長男子で請神の言葉が云える人に依頼し、一族の特別の地位にある人、代表者ということではない。擲筭（トウカク）がなされる。祖塔の亀墓部分に黄色の掛紙が一杯おかれる。爆竹がならされる。紙銭を焼く。拝々が終了し、一同片付ける。持ってきた供物は各自持ち帰る。

このあと宴会の席をもうけ、一同喜びを共にする。2005年の時は20卓約200人が集まった。この宴の費用は宗族の資金から負担するのではなく、毎年この費用に対する任意の寄付世帯をつのり、その世帯（複数）が負担することになっている。T姓宗族には宗族としての共有財産はない。

T姓は祖堂がなく又墓もかつては散在していたので宗族一同が結集する機会はなかったが、祖塔の建設によってすべての子孫ではないが多くの子孫を結集させ、祖先祭祀をおこない、一族の団結、族譜の編集なども人々の話題となり、祖塔の建設が新たな宗族の結集を進めようとしている。祖塔におさめられている骨骸は、來台祖以来の祖先であり、掃墓に集まる人々の生活と結びつく祖先といえる。

B村Z氏の掃墓は清明の日におこなわれる。当日、祖塔前の広場に多くの人があつまり、テーブルの上には各世帯で持ちよった供物で一杯になった。代表者が請神を述べ、一同拝々した。後の宴はなかった。Z氏は祠堂を持ち、宗族の結集は、祠堂、祖塔の位牌、骨によりおこなわれているのを見る。

〔4〕祀られる者と祀る者

祖先祭祀について主として台湾北部客家村A里、B村の墓の場合について述べてきたが、以下のことが見出せると思われる。

①祖先祭祀の対象となるのは二次墓＝吉葬墓に安置された骨骸である。人々の故地である以前の東南中国における研究によれば、吉葬される死者は財力、名声その他特別な人で、多くは忘れ去られ、墓は失われるとされる。來台後2、300年という比較的浅い年月を経てきた台湾において、種々の困難はあったが現在に子孫の引き続いている人々の多くが、特に來台祖以来の祖先の墓を記憶し祭祀しているのを見る。T氏の場合、現在まで7世代を経過しすべてではないがかつて多くの墓の掃墓儀礼を分担して実施してきた。

骨骸という実体からして、当然、墓の骨骸は來台祖からということになる。一人墓が基本であった時代の旧来の掃墓において、來台祖は必ず祭祀すべき対象であったのは当然であり、現在の祖塔という巨大な合葬墓に祭祀されることになっても祖塔内の祭壇の中央、最上部の位置にある。台湾における宗族結束の重要な一つは、來台祖であることがわかる。これは位牌についても同様で、一般に合祀型の位牌の中央は來台祖以前の代々の祖先を一括して示し（個々の姓名はない）、その左（向かって右）にまず來台祖の姓名及び妻の姓が記され、以下左、右の系列で以後の祖先名が個々に明示されている。

祖塔の構築によって、それまでばらばらであった骨骸がまさしく父系出自集団としての宗族の構図を示すものとなった。祭祀する現存子孫らの死後の場も予定されることによってあの世とこの世の連続性は深まったといえる。又、祖骸の安置上妻であり母である、他姓の婚入女性の安置も独立明示され、それは祖先祭祀に参加する現存世帯の人々の様相と直結する状況である。

②墓の風水に関してはすべて地理師がおこなう。葬儀は主として道士がおこなうが、日時その他地理師の役目は重要である。

墓については一次葬（安葬）からすべて地理師がおこない道士らは関与しない。東南中国において風水の判断は二次墓からとされる。しかしここでは一次墓の場所、位置、時刻などすべて地理師の指示にしたがい、良い風水の地に穴がほられ、棺が埋葬される。一次葬の儀礼の中ですでに死体は龍脈に関連し、子孫らに影響をもたらす存在であることを示している。A里の公共墓地自体が風水の良い地とされている。

検骨はすべて検骨師がおこない骨骸は金斗に納められ、良い日、良い時を待ち、吉葬されるが、これもすべて地理師の指示による。祖塔のような合葬墓の建設にも必ず地理師が関与する。この際、祖塔の向きが（方角）重要で、宗親中の現存最年長の生年その他が関係するとし、個々の骨骸に適合する風水をみる旧来の一人墓とは異なる考えがある。B村Z氏祖塔建設に関し従来陰居は湿った暗いという思いがあったが、いまは陽居も陰居もなく、両者共乾燥したさわやかさが必要であるとし、新しい祖塔には通風孔をもうけ乾爽を考えたとしている。又、台湾の平均寿命はのびたが、人生には終りがあり、遂には永恒の家に住むとし、現世の住居と同様に立派なものであるべきとしている。風水による「気」そのものについての言及はない。Z氏祖塔建設に関して風水の良さが考慮されるが、それは快適な陰宅を用意することによって祖先に快適な生活を送ることを願い、そのみかえりとして祭祀する者への幸福が与えられることを期待しているように考えられる。

③祖先祭祀に関して重要なのは供物である。一般に人々はある世で現世の同様生活物資が必要と考えている。墓や位牌の祭儀に際し、一定の食物を中心とした供物が供えられる。祖先はこれらによりある世で快適な生活をおくることができるとし、祀る人々の意識の中にはこの世の延長線上にある自らの祖先界での姿でもある。ある世での祖先の快適な生活は孝の姿である。祖先への供物は世帯単位で、祭祀対象に対して供えられたそのみかえりとして与えられる幸福は、神々に祈願する人々と間に存在する贈与における互酬性と同様である。

この祖先と祈願する人々との関係は、墓の骨骸と位牌の靈魂の両者について同様で、フリードマンの述べたような二面性はみられない。フリードマンは、位牌は尊敬し崇拝する存在で、子孫を統轄する「能動的存在」であるのに対し、墓の骨骸は恐ろしい死体で、墓の風水から得られる気の媒体にすぎず、子孫によって墓は統割される「受動的存在」とする。

しかし事例からは祖先より得られる幸福は、供物を供えて祭祀する各世帯に与えられ、それは位牌、墓の両者について相異はみられないように思われる。

④祭祀には、世帯の男性、女性何れもがかかわる。位牌にまつられる女性は、わずかに夫の姓名の下部にその姓のみが付随するにすぎない。祖塔においては、左右優劣の別はあるが夫とまったく同等の空間を有し、明示され、祀る世帯の形態に近似している。しかし祖先として祀られるのは他姓をなめる女性配偶者のみで、男性と同姓同宗の未婚の女性の姿はない。未婚の女性は祖先とならず、一次墓で忘れ去られるか、寺廟の霊塔にあずけられるなど祭祀者のない鬼となる。

位牌祭祀は父系一族を統合する存在であり、それは祖堂、宗祠の存在が必要であるとされた。T姓の場合、祖堂はなく、祖塔の建設によって骨骸が一堂にあつめられ、一族統合の場となり、更に今まで持たなかった祖堂の建設、族譜の編集まで人々の話題にのぼっている。

⑤A里の近くの村のH氏墓は、祖塔とは異なるが、私有地内の住居の背後に小さな山があり、その頂上に來台祖がまつられ、以下の死者は順次輩にしたがい低い位置に祖先として祭祀され、この小さな山全体が祖先祭祀の対象となり、一族の焦点となっている。この小山に登ると下はるか川が流れ、遠くに山が連なる美しい地である。

B村Z氏祖塔には新しく未婚の女性の骨骸を安置する部屋がもうけられた。祖先の安置場所とは区別された一室であるが、掃墓の際の祖塔からすればその一部であり、2006年の掃墓の際、関連世帯はこの部屋の前にも供物を供えたのをみた。しかし未婚の女性はいわば鬼なのである。漢族の親族関係の同質性について父から子に伝わる骨が重要であり、しかし女性は父からの骨を子に伝えることができないとされる。父系出自は、姓によって示され、A里で種々みられた養取りの中、理想形は同姓同宗からの過房子であったが、異姓養子、招婿もかなりあり、それによって得られた異骨男子を同姓（同皮）とする方法がある。同骨同皮（中身も外側も同じ者の意）でなく異骨同皮の後継男子の存在も種々みられた（植松2002）。

一族を統合させる祖先祭祀の対象としての位牌と同様に、墓も又重要であることについてのべてきた。特に祖塔の出現は、祖骸を一同に集めることによって位牌以上に一族統合の契機として機能が明確になったといえる。

⑥農地所有の経済的意義がうすれ共有地を持たず、都市生活者も増加し人々の社会生活は非常に変化した。都市においては、火葬が中心で、葬儀は自家ではなく葬儀館が一般となった。又会社の経営による十数階の巨大壮麗な霊塔内のロッカー式の骨骸安置の方式が祖先祭祀に対しどのような影響をもたらすかのそれらの新たな展開については別稿でおこないたい。

（付記）本稿は2006年7月3日の神奈川大学比較民俗研究会における発表をもとに加筆執筆したものである。

参考文献

- Freedman.M. 1996 Chines Lineage and Society: Fukien and Kwangtung（田村克己・瀬川昌久訳 1987『中国の宗教と社会』弘文堂）
- 堀江俊一 1989 「台湾の位牌祭祀」渡邊欣雄編1989『位牌祭祀』

- 平敷令治 1989 「台湾漢人社会の墓制」渡邊欣雄1989『位牌祭祀』
 James.L.Watson/Evelyn.S.Rawski 1988 Death Ritual in Late Imperial and Modern China.University of
 California Press (西脇常記・神田一世・長尾佳代子訳 1994『中国の死の儀礼』平
 凡社)
 瀬川昌久 2004 『中国社会の人類学』世界思想社
 鈴木清一郎 1934『台湾旧慣・冠婚葬祭と年中行事』台湾日日新聞社
 新埔鎮誌編集委員会 1997『新埔鎮史』
 植松明石 1996 「台湾北部客家村の死者儀礼」『国立歴史民俗博物館研究報告 第68集』
 植松明石 2001 「骨の靈力—台湾の事例から」『民俗文化研究』第2号
 植松明石 2002 「養取りと女性」『民俗文化研究』第3号
 植松明石 2005 「台湾北部客家村の巨大合葬墓と宗族」『民俗文化研究』第6号
 台湾省政府民政庁 1989 『台湾地区現行喪葬礼俗研究報告』
 台湾文献委員会編 1993 『台湾婚葬習俗口述歴史録』
 渡邊欣雄 1989 『祖先祭祀・環中国海の民俗と文化—3』凱風社
 渡邊欣雄 1990 『風水思想と東アジア』人文書院
 渡邊欣雄 1991 『漢民族の宗教—社会人類学的研究』第一書房
 渡邊欣雄 三浦国雄編 1994 『風水論集』凱風社
 徐 福全 1989『台湾民間伝統葬儀節研究』

新刊紹介

庄 長江著 『泉州戲班』

本書は、『泉州習俗』『泉州古歴』『泉州民間舞蹈』などの一連の“泉州民俗文化叢書”の中の一冊である。泉南地方の伝統演劇には、梨園戲、高甲戲、打城戲の三大演劇があり、人形による布袋戲もまた有名である。泉州を訪れて気づくことは、天妃宮や旧市街の廟には必ず戲台（作り付けの舞台）が設けられていることである。今でも春節や神の誕生日には連夜、プロの劇団により演劇が奉納される。華僑の郷といわれる泉南では、経済が繁栄し生活にゆとりがあったため、節日が頻繁に祝われ、その際に演劇は不可欠のものであったという。また、結婚式や葬式、あるいは祝い事では、「前棚喜礼後棚戲」とされた。そのため、この地域

には実に多くの劇団が林立し名優が輩出した。著者は、これらの劇団や人物、上演演目、および演劇に関する故事伝説について、丹念な調査に基づき詳細に記述している。とくに、興味深かったのは、第2輯“戲班習俗”であり、“請神”“賀寿”“跳加官”などの、開演冒頭に行われる「演出礼俗」についての記述である。これらの“戲班習俗”は現在でも行われていて、伝統演劇の本質を考える際の貴重な資料でもある。本書には名優の古い上演写真が豊富に掲載され、さらに付録として521の上映演目の表がついている。

(古谷野洋子)

2006年 福建人民出版社